

最優秀賞は田辺聖子賞のページ(16ページ)に掲載しています。

【優秀賞】

「よるのばけもの」を読んで

加藤 千晴(兵庫県 甲南女子中学校 3年生)

この小説は、主人公である中学生の安達(あっちー)と彼のクラスメイトの矢野さんとの物語である。矢野さんは、クラス全員からいじめられており、少し変わった性格をしている。彼女は、たとえいじめられているときでも、必ずにんまりと笑っているの、いつもクラスメイトの怒りを買ってしまう。あっちーもまた、クラスメイトから仲間外れにされないように一緒になって彼女を無視したりしている。

私は、今までにいじめをテーマに扱った作品はいくつか読んだ。しかし、この物語は他の作品とかなり違う。あっちーの体が夜になると八つの目玉と六つの足を持つ、不気味な真っ黒の化け物になってしまうのだ。いじめられている矢野さんがクラスメイトへの嫌悪感などの様々な感情から化け物になるのではないところが意外性があって、面白いと思うと同時に、なぜ彼は化け物になるのかと思った。

ある日の夜、いつものように化け物の姿になった彼は、昼に忘

れてきた宿題を取るために、学校に忍びこんだ。そして帰ろうとしたそのとき、「なにし、てんの？」という声が聞こえた。矢野さん独特のどもったような喋り方だ。彼女は、なぜか化け物の姿のあっちーを見ても全く怖がらず、しかも「あっちー、くんだよ、ね」と言った。

私は、なぜ化け物の姿なのにあっちーだと分かったのだろう、と思った。もしかしたら矢野さんは、普段の学校での彼の行動から彼が化け物だと分析したのかもしれない。そして確信があったわけではないが、言ってみただけなのかもしれない。矢野さんは、考えることが普通の人とずれているけれど、人を見抜くことができ、大人びたところがあるように思う。矢野さんの言葉を読むと、あっちーなのかを確認しているようなニュアンスがあるような気がする。

そして、この日からあっちーと矢野さんは毎晩学校で会うようになった。二人は会話を重ねるうちに、お互いのことも聞くようになっていった。会話の中で、私は二つの言葉が印象に残った。

まず、「お昼の学校じゃ、休、めないから」という言葉だ。これは、何のために夜に学校に来ているのかというあっちーの質問に対する矢野さんの答えだ。矢野さんがいつもにんまりと笑っているのは、いじめが平気だと思っているわけではなく、本当はつらかったのだと分かり、驚いた。私は、小学生からずっと様々な場所できじめについて考える時間があった。考える度に多くの意見や解決策が出るが、いじめが無くなることはない。矢野さんのこの言葉からは、学校生活には何も期待をしていないという彼女の気持ちが感じられる。

そして二つ目は、「癖なのかなあ、怖いと、無理に笑っ、ちゃうの」という矢野さんの言葉だ。ここを読んだとき、今までの彼

女の行動が全てつながった。いつも不気味に笑っていたのは怖かったから。つまり学校にいる間、ずっと怖がっていたのだ。矢野さんの言葉の中で一番衝撃を受けた。

矢野さんは、あっちーが化け物の姿でも話せる友達ができたことで、本当に救われる思いがしたはずだ。たった一人でも自分に救いがいれば、世界の見え方が大きく変わるのだと感じた。あっちーは、彼の中の醜い部分が化け物になっているのではないかと思っただ。その醜さを自分で克服できて強い人間に成長したのだと思っただ。

矢野さんの言葉一つ一つが、同じ中学生の私に刺さった。いじめについて考える機会は、これからもきつとあるだろう。そのとき私は、自分の行動を見つめ直して弱さを克服できるだろうか。できる自分でありたいと強く思っただ。

書名…よるのげもの

著者…住野よる